

漫画作品にみる図書館員のイメージ —図書館員の職業観と人物像—

沖縄県・山口真也(沖縄国際大学)

1. はじめに

メディアの中で図書館員がどのように描かれているか、ということは図書館関係者であれば誰もが気になるころだろう。ここでは、漫画作品にみる図書館員のイメージについて、職業観と人物像を中心に紹介してみたい。

2. 図書館員という職業に対するイメージ

2.1 女性的な職業・楽な仕事・暇そうな仕事

まず、漫画の中で図書館員がどのような職業として描かれているかを確認してみよう。これまでに収集した漫画 1898 作品 に描かれている図書館員 491 人を性別に集計すると、全体の約7割(学校図書館員は83%)が女性として描かれていることが分かる。この中には背景に小さく描かれるだけの人物も含まれているが、必要性の乏しい場面でも女性が多く描かれているということは、「図書館員＝女性が多い職業」、「女性向きの職業」として捉えられていることを表しているのではないだろうか。

こうしたイメージと関連してか、漫画の中では、「図書館員＝体力的に楽な仕事」というイメージも読みとることができる。例えば、「**おたんこナース**」(④、館種不明、佐々木倫子、1997)には、看護師の仕事に疲れた主人公が図書館員とお見合いをするエピソードがあるのだが、主人公は「結婚したら…休日はおたがい読書にふけり、静かに時間がすぎていく」と穏やかな生活を想像しており、「激務」とされる看護師の対極に位置する職業として描かれている。また、「**緑の頃わたしたちは**」(公共、谷川史子、1991)では、死を宣告された男性が、余生を図書

館員として静かに過ごすというエピソードが綴られており、ここでも健康に不安を抱えていてもできる仕事という認識が見え隠れしている。この他にも、「**5月の風は優しく**」(学校、中里あたる、1979)や「**MASTER キートン**」(②、公共、浦沢直樹、1989)、「**セーラー服心中**」(学校、山崎みちよ、1995)のように、図書館員がカウンターで居眠りをしている場面が描かれることも少なくない。「**聖・三角形**」(大学、橋本多佳子、1988)では、「授業時間中はヒマなのよ」というセリフも書かれており、図書館員という仕事は、単に「楽な仕事」というだけでなく、「暇な仕事」として描かれることも多いようである。

2.2 平凡な日常を象徴する職業・つまらない仕事

漫画作品には、単調な毎日に辟易し、このままでよいのかと悩む主人公の生活を描く作品が多い。図書館員という職業は、そうした作品の中で、退屈な日常を際立たせる仕事として選ばれているようにも思われる。例えば、「**ひらひら**」(公共、小椋冬美、1989)に登場する女性職員は、閉館になるのを待つだけの毎を送り、夜毎着飾って街に出かけてはナンパを繰り返し、「風になりたい」と願っている。「**緑の家**」(公共、桜沢エリカ、1997)の職員も、街に繰り出しては男性を誘惑し、自宅で大麻を密造して、日常生活にはないドラマ性を求めている。「**わたしたちの結婚**」(公共、沖野ヨーコ他、1997)には、芸能人の妹に劣等感を持つ図書館員が登場するのだが、ここでも図書館員は華やかな世界と正反対の、地味な仕事として位置付けられているように思われる。なお、これらの作品では、図

書館員という身分は脱出したい退屈な日常の象徴であり、その職務が魅力的に描かれることはまずない。「ロマンス」(公共、望月玲子、1990)も同様のテーマの作品だが、「仕事面白いですか」と問われた主人公が、「面白いもんですか、退屈よ」と即答する場面もある。

3. 図書館員の性格・人物像にみるイメージ

3.1 ルールに厳しい・怖い人物

次に、漫画に描かれる図書館員の人物像についてみてみよう。漫画では「騒がしい利用者を注意する」というパターンで図書館員が登場することが多いのだが(約半数)、その多くは、眉を釣り上げ、利用者よりも大きな声で「静かにしなさい!」と怒鳴り散らしており、ルールに厳格で、融通の利かない人物像が見て取れる(「地獄先生ぬ〜べ〜」(⑬、公共、真倉翔他、1996)他多数)。また、閉館時間を厳守することにこだわる職員も多く描かれており、鍵束を見せつけ、閉館時間きっかりに利用者を追い出す人物(「MONSTER」⑧、大学、浦沢直樹、1998)や学生の間で「司書さん、時間通りに閉めちゃう」と噂になっている人物(「好きさ好きさ好きさ」、大学、小野塚カホリ、1999)等も登場している。こうしたイメージと関連してか、漫画の中の図書館員は、「怖い」という評価を受けていることも少なくなく、「HAPPY GO LUCKY」(学校、藤臣花恋、1997)や「天才柳沢教授の生活」(⑩、大学、山下和美、1997)では、「鬼よりこわい」、「教授も怖がって避けてる」人物が登場している。

3.2 知的・蔵書に詳しい・頼れる人物

上述のように漫画の中では、「利用者を注意する」場面が多く描かれるのだが、90年代後半以降の作品では、資料知識に富む人物として図書館員を描く作品が増加しているようにも

思われる。例えば、「幻境図書館」(全4巻、公共、河路悠、1996)や「ハーフ&ハーフ」(公共、杜野亜希、2001)では、わずかなヒントから蔵書を的確に探し出すことができる図書館員の専門的な姿が描かれており、「月とたからもの」(公共、宏橋昌水、2000)や「不死鳥のタマゴ」(全3巻、公共、紫堂恭子、2005)でも、利用者の調査を手伝ってくれる頼もしい存在として図書館員が描かれている。他に、「美味しんぼ」(⑥、国立、雁屋哲他、1998)や「鋼の錬金術師」(③、国立、荒川弘、2002)等にも、専門知識を駆使して主人公らの調査に一役買う図書館員が登場している。ただし、こうした専門的な姿が描かれるのは公共・大学・国立図書館員に限られており、学校図書館員の場合は、多くが利用者を注意したり、閉館を告げるという役回りを果たしているに過ぎない。「資料の専門家」というイメージについては、館種による偏りが生じ始めているようである。

3.3 人嫌い・心に深い傷を持つ人物

映画の中の図書館員を分析した伊藤敏朗氏によると、図書館員とは、「何を考えているかわからないような人間像を描きたい場合の恰好の職業」として描かれることが多いという。漫画作品でも、「人嫌い」「無愛想」といった特徴を持つ図書館員が描かれることも少なくない。例えば、「恋とマシンガン」(学校、徳丸佳貴、1998)に登場する男性職員は「ガキは嫌い」と同僚に本音を漏らしており、「恋人もどき」(公共、川崎ひろこ、1984)の女性職員も「愛想がない」と評されている。少女漫画やレディースコミックでは、過去の辛い恋愛経験によって、心を閉ざすようになってしまった人物が描かれることが多く、「不思議の国のミス・アリス」(公共、めるへんめーかー、1986)には、「もう二度と恋なんてしない」と決心している女性職員が描かれ、

「週末 Heaven」(公共、石塚夢見、1996)でも、恋人に裏切られ、失意を抱えて図書館でバイトを始める女性が登場している。「七月はキルケゴール」(公共、望月玲子、1995)にも、中学時代に妊娠し、出産後に子どもを捨てた過去に苦しみ、過去から逃げるように日々を律して過ごす図書館員の姿も描かれている。これらの作品では、他者との接触をできるだけ避け、平穏に生きることができる職業として図書館員という仕事選ばれていると考えられるだろう。

3.4 恋愛に臆病、または恋のライバル・憧れ

最後に、漫画の中の図書館員の恋愛観についてみてみよう。まず女性職員についてみると、恋愛に対して臆病、奥手な人物として描かれることが多い。例えば、「本当のことを言おうか」(公共、佐野未央子、1991)には、男性に声をかけられただけで顔を真っ赤にするようなアルバイト職員が登場する。「天才柳沢教授の生活」の大学図書館員も、現実世界より想像や小説の中でのロマンスを求める人物である。「教師にやらせな!」(学校、酒井美羽、1997)に登場する「ホモ系ジュニア小説」ばかりを収集している職員や、「Luv～愛とか、恋とか。」(全2巻、学校、兄崎ゆな、2000)の、アイドル雑誌を「いとシしてチェック」している職員もまた同じようなイメージで描かれていると考えられる。「あたしのための恋の唄」(学校、奥森晴生、2003)では、主人公が「罰ゲーム」として「司書のおばちゃん」に告白するというエピソードが描かれており、ここでも図書館員は恋愛対象には成り得ない人物として登場している。女性の図書館員が「ハイミス」というあだ名で呼ばれることが多いことにもこうしたイメージが表れているのではないだろうか。「紅い牙一ハトの旋律」(学校、柴田昌弘、1981)、「エラリーによろしく」(学校、牧あけみ、

1984)、「流星文庫」(学校、植木家郎、1999)。

ただし、こうしたイメージについては絶対的なものではなく、正反対のイメージで描かれる作品があることにも触れておきたい。例えば、男性職員については恋愛経験が乏しい人物として描かれることは少なく、むしろ主人公が憧れを抱く魅力的な人物として描かれる作品の方が多い。「悪魔の花嫁」(文庫7、公共、あしべゆうほ、1979)、「夢から醒めても恋してる」(公共、坂井久仁江、2003)他)。また、女性職員についても、恋の駆け引きが得意な人物が描かれることもあれば、少女漫画の中で「恋のライバル」として描かれることもないわけではない。例えば、「図書室の彼」(学校、藤村真理、1988)では、主人公が思いを寄せる男子生徒と割り切って付き合うクールな図書館員が登場するし、「DESIRE」(学校、高橋由紀、1988)や「恋する毛糸玉」(公共、森崎法美、2001)に登場する人物は、ライバルであると同時に憧れや劣等感を抱く人物としても描かれている。なお、こうしたイメージは最近の作品だけに見られるわけではなく、「おくさまは18歳」(学校、木村三四子、1976)など、70年代の作品の中にもいくつか確認できる。図書館員の恋愛観については、多様な描かれ方がなされてきたと考えてよいだろう。

4. おわりに

以上、漫画作品にみる図書館員のイメージを紹介してきたが、漫画の数は膨大であり、ここに挙げていないようなイメージを読み取ることができる作品も多数存在するだろう。今後も継続して調査を行い、分析を深めていきたい。(2008年5月10日)

※各作品の書誌情報はこちらに掲載していません：<http://blogs.yahoo.co.jp/yamacyn>